

序 章 和解を求めて

あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである。すべてのことを、つぶやかず疑わないでしなさい。

(ピリピ二・一三一—一四)

好善社ときいて、一言のもとにそれはなにをなすところかと答えられる人は、数少ないことだろう。答えられるどころか、その存在さえ知らない人が多いのではないだろうか。国電目黒駅西口からバスで一〇分とかからないとところに好善社と小さな表札のかかった一軒の社屋がある。初めて訪れた人は、その周囲の消防署、銀行などの建物のみ目について、ほとんど見失い行き過ぎてしまうにちがいない。この真向かいに、もと目黒競馬場があったことは、いまだにバス停の名称として残されていることから知る人は多いことだろう(口絵⑩)。だが、今

の好善社の辺りに慰廢園という、らい療養所があったことはあまり知られていないにちがいない。いや、知っているも語ろうとしない。むしろ、忘れようとしているにちがいない。

一九七七年十一月十九日、好善社は発足以来一〇〇年を迎えた。藤原偉作現理事長は、この人びとの忘れようとしていることと取り組み、「らい百年の歴史に立って」（広報紙「ある群像」第三一号）の中で次のように述べている。

……この百年に、どれほど多くの人びとを締め出し、死に追いやったことか、にもかかわらずその罪過の責任を、神はわれわれに負わせるというのではなく、キリストによってわれわれをご自分に和解させ、和解の務めを授けてくださったのである。だからわれわれが療養所に足を踏み入れるとき、そこに奉仕などという感覚はどこからも生れてこない。ただ、キリストの十字架の陰にかくれ、和解を求めて出かけてゆくのである。

かつて、捨て去った人びとと向かい合うとき、「あなたはいったいなにか」と問われるであろう。その人と、その人格と正しく向きあうとき、これは人格ぬきの「らい」の問題ではなく、まさに人間の問題であることが、おのずとわかってくるはずである。

好善社、現在の歩み、性格はここにつきている。
らいの歴史は長い。

イエスが山をお降りになると、おびただしい群衆がついてきた。すると、そのとき、ひとりらしい病人がイエスのところに来て、ひれ伏して言った、「主よ、みこころでしたら、きよめていただけなのですが」。イエスは手を伸ばして、彼にさわり、「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われた。すると、らい病は直

ちにきよめられた。

(マタイ八・一一三)

人類の歴史とともに古くよりこの病は地球上にあった。日本でも昭和初期までは街頭で浮浪する人びとの中にこの病人を見かけたものだ。また、『小島の春』（小川正子）、『いのちの初夜』（北条民雄）などの文芸作品でこの病気を知った人も多い。

しかし、現代、どれだけの人が、これらの書物を記憶し、らいの名前を知っているだろうか。人びとが忘れてきているほど、らいの病気が巷から姿を消していることは、あるいはよろこぶべきことかもしれない。小、中学生の子供などは、ほとんどきいたこともない病名だろう。だが、現在のあらゆる難病という難病と比較して、これほど、悲劇的な歴史を背負った病気はかつてなかったし、これからも恐らくないことだろう。

天刑病だとも言われた。遺伝病と長い間信じられてきた。らいが、らい菌による伝染病、それも極めて伝染力の弱い伝染病と分かったのは、一八七三年、ノルウェーのハンセンによってらい菌が発見されてからである。そこでハンセン氏病とも言う。その菌は、結核菌によく似ている抗酸性の桿菌^{かた}で、幼児期に、菌を排出する患者と、長期間、密接に接触したとき、皮膚の末梢神経から潜入すると言われている。かつては不治の病と言われてきたが、日本では昭和二十二年（一九四七年）以来、プロミン、DDS、チオ尿素系の他に、ポリサイダル、リファンピシンなどが、次々と登場し、早期発見、早期治療によって治る病気となった。

だが、余りにも薬の発見が遅すぎた。なにしろ有史以来の病気なのだ。たとえ、薬の恩恵に浴して、治っても（無菌者になっても）後遺症が残った。頭髮を、鼻を、指を、手を、足を、目を失った。そして、失ったもの

代償のように、一般人から偏見という重荷を背負わされた。療養所という病気を治すところ、治ったら出てくるところと単純に考えがちだが、らい療養所の場合はそのような単純な物差しでは計れない。

今日のが国のらい療養所——それは見えなにかき根によって外界から遮断された、治療と生活の場である。「生活」ということは、病気が治っても、そこから離れられないということだ。

国立一三か所、私立三か所の療養所の入園者は合計約一万名であるが、そのうちの八〇パーセントが菌陰性者、つまり治っていないながら、なお、とどまることを余儀なくされている。平均療養期間が三〇年という、気の遠くなるような療養所生活である。余りにも長いこの時間は、親兄弟の関係を引き裂き、社会への感覚を麻痺させ、肉體の変形は極度に自らを卑下させた。そのうえ、一般社会には、その治療者を受け入れる心の準備がなにもないのである。

療養所は小さいものは五、六万坪、大きいものは二〇万坪にも及び、生活はむしろ恵まれていると言えるだろう。食住は無償で与えられているうえに、一人月々、平均四万五〇〇〇円ぐらいの患者給与金(自用費)が支給されている。テレビ、バイク、自動車など、文明の利器にもことかかない。もし人が物質のみで生きられるというなら、このくらい安定した場所はないことだろう。この療養所を訪れた者は異様な静けさに気づくかもしれない。子供のいない世界なのだ。一九七七年現在、平均年齢、五八歳、療養所は老人ホーム化している。テレビをみる人、農作業をする人、菊をつくる人、書道をたしなむ人等々、一見、平和そのものだ。だが、もし、あなたが、病人でもないのに、そのような環境の中にいることを強制されたら、どんなものだろう。人間の社会は一つの連帯によって構成されている。一生涯、離ればなれに暮せないようにできている。それを心ならずも余儀なくされている人たち。好善社はこの現状に目を閉じることなく凝視し続けている。

一〇〇年の歴史は、必ずしもらしい事業とのつながりだけではない。好善社の創立者であるミス・ヤングマンは、明治六年（一八七三年）、アメリカより来日した長老派教会宣教師である。最初の目的は教育事業だった。伝道学校、小学校、女学校と数々の学校を創立した。貧しい者、悩める者の救済の末が、らしい事業につながったのである。そして、そのらしい事業はまだ終わっていないと藤原は、好善社が発刊している「ある群像」（第二三号）の中で述べている。

……それでも療養者は実によく外部の情報に通じている。それは新聞、ラジオ、テレビ、そしてさまざまな印刷物を見ているからである。しかし、これらは、なにも応答をしない機械であり紙にしか過ぎない。反発もなければ共感もない淋しさである。私はおもう、手みやげなどはいらぬ、ただそこを訪ねる人が多くなくて、なんでも話ができる間柄が多くなってくれれば……。

また次のようにも書いている。

……好善社の働きも変った。なにかを建てたり、品物を寄贈したりというものではない。青森から沖縄までの療養所を訪ね、懇談を重ねることが当面の仕事だといってもよい。療養者の自主性を尊重しながらこちらの意見を述べ、療養者自身の活動を盛りあげて支援することにあると言える。喜ばれもし嫌われもし、けんかもする、欲しいのは真の人間関係だと考えるからだ……。

このような考えのもとに彼は、一年の四分の一は療養所を巡っている。現在、好善社の有給の社員は理事長一人であり、あと、二九名の社員は、それぞれ他に職を持ち奉仕の形で活動している。これらの活動資金はすべてキリスト教界からの募金によってまかなわれているから、不安定な運営の感はまぬがれない。

だが、われわれ一般人が療養所というかき根のなかに閉じこめ、社会から患者を締め出したこと、人間関係を

忘れ平然としていることへの負い目が、好善社の人びとをかりたて、今日も、明日も、彼らは和解を求めて出かけてゆくのである。